

ずいそう

コミュニティの絆

羽 入 昭 吉



私が社会人になったのは、今から32年前、北海道出身でありながら、そのほとんどを栃木県で過ごしています。独身のうちは、コミュニティやご近所付き合いとは縁などなく、「隣は何をする人ぞ」とばかり、自分のことだけを考えて隣近所は意識の外という暮らしぶりでした。

結婚して子供ができるというので、マンションを購入したのが20年前、当時の住宅都市整備公団が開発した新興住宅地にあり、入居者の多くは私と同世代で子供達も同年代という賑やかな住宅地でした。栃木県の片田舎に突如として人口1万人の核家族の集合体が出現したといったところです。

そこには自治会という組織があり、輪番制で誰もがやらねばならないことを知りました。仕事関係以外の付き合いは同窓会くらいの私としては、地域のコミュニティヘデビューすることは、苦痛以外の何物でもありませんでした。

しかし、時が経つにつれ、多くの住民同士が入居時からの顔見知りで、子供も同年代であったことから、ご近所付き合いも自然発生的に盛んになっていきました。

その3年後に自治会長をやらざるを得なくなり、マンションの75世帯を率いて、多くの行事を指揮することになりました。自治会対抗運動会、夏祭り、防災訓練、子供会、交通安全の立ち会いなど、多くの行事がありました。

また、自治会役員は、とてもウマが合う6名(家族)で構成され、打合せや行事の後の打上げ、忘年会と、何かにつけ飲み会の頻度も多く、家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。

特に夏祭りと秋の運動会は一大イベントで、企画を練り、それを住民に説明し、気分を盛り上げていくわけです。役員とは毎週末に集まり、どれほど皆を盛り上げられるか、アイディアを出しながら議論していると、だんだん気持ちが高揚してきて、その雰囲気酔ってしまい、「それでは、うちへ来て飲みませんか！続きはそこで！」となるのです。メンバーの奥様と子供達も呼んで、一緒になってワイワイガヤガヤ、楽しい酒に酔いしれるわけです。この至福の飲み会は何度も

続きました。同じメンバーでの最後の飲み会は、自治会役員を交代する時でした。お役目ご苦労様ということで、近所の居酒屋に6家族全員が集合し、別れを惜しみ、寂しさを感じる飲み会でした。

核家族といえ、隣近所との交流が無く、何かあっても我が家が平和ならそれで良いという、コミュニティとの関わりが希薄な都市部に暮らす家族をイメージします。しかし、この自治会は、核家族の集合体とはいえ、地域のコミュニティが成り立っていたのです。

地方から引っ越してきた見知らぬ家族ばかりが集まったことから、自然に心が開き、「皆のために」という気持ちになれたのだらうと思います。

しかし諸行無常の響き有り、夢のようなコミュニティライフも長くは続かないものです。入居後、10年を過ぎるころから、転勤のため仲間達が一戸、また一戸、遠くへ引っ越していきました。その後は賃貸契約の若夫婦が2～3年おきに入れ替わり立ち替わり入居と退居を繰り返し、気が付いたら、我が自治会は知らない人ばかりになってしまいました。もともと住んでいた住民は少数派となり、我が町は世間一般の核家族の集合体、すなわちコミュニティの希薄な街へと変化したわけです。

ところで、この10年程度の間に、「住民参加型」という修飾語をつけた道路や公園などの維持管理が提唱されるようになり、その成功例が雑誌などで紹介されるようになってきました。

この維持管理手法の成否は、住民の心が繋がったコミュニティがあるか否かによって決まるのではないのでしょうか。

かつての我が自治会では成功しそうな気がします。今の自治会では、「同じように税金を払っているのに、なぜ自分たちで舗装の穴埋めをしなきゃならないんだ！」と、苦情が出るだけのように思います。

東日本大震災では、本物のコミュニティを垣間見た気がします。助け合うこと、皆のためなら面倒な仕事も惜しまない、美しい日本人の心を大切にしたいものです。